

## 第4回鎌倉市児童福祉審議会会議録

平成12年12月16日(土)9時35分～12時00分

- 委員長 第4回の鎌倉市児童福祉審議会を始めさせていただきます。  
年末の中、お忙しいところどうもありがとうございました。またきょうもいろいろな情報を交換し、皆さんからのご議論をいただきたいというふうに思っております。  
それでは事務局の方に出席委員等の確認をお願いいたします。
- 事務局 委員につきましては、全員出席をされています。なお、幹事2名につきましては、所用のため欠席という届け出がございます。以上です。
- 委員長 それでは次に、きょう配付の資料の確認をしていただきます。これも事務局の方からお願いいたします。
- 事務局 きょう予定しています資料につきましては、前回第3回の審議会の会議録、資料4-1「子どもの発達と生活」、資料4-2「子どもの発達と生活 - 仕事の場合から - 」、資料4-3「平成12年度の待機児童の状況」という資料を提出しています。それからきょうテーブルの方に配布していますが、これから報告をいたします内容に関連しましたリーフレットが1枚、「食生活指針」というのがあろうかと思えます。部数がないものですから、委員さんにのみ配布しました。それから、先ほどお配りしましたB4横の資料ですが、これは  
委員さんの方から提供いただきましたので、後ほど説明をお願いしたいと思っております。以上です。
- 委員長 ありがとうございます。それでは議事に入らせていただきますが、議事に入る前に第3回の議事録作成の中で、事務局の方から委員の方々にお願いがございまして、テーブルを見ていただくとわかるのですが、録音をとっております。これも全部ということではないのですけれども、時々録音が聞きにくいということがあろうようで、少し大きめの声でご発言いただけますとテーブルの方に入りますので、その点をお願いしたいと思います。  
それから毎回のことですが、傍聴席の方々にお願いがございます。  
「傍聴席の皆様へ」とご案内をお配りしておりますけれども、これは改めて読み上げません。私ども委員が自由闊達な意見を交換するという趣旨で、傍聴者の皆さん方には会議中にご意見をいただくということとはできないというお約束でご入場いただいております。ただ会議が終わりました後、電話、ファクス等で感想・ご意見をいただければ次回以降の審議会に反映できる部分は反映をさせていきたいと思っております。よろしくお願いをいたします。  
それでは早速、前回会議録の確認をいたしたいと思うのですが、既に委員の

方々にはお配りをし、読んでいただいておりますので修正点がございましたら、後ほど事務局の方にお知らせをいただき一応確認をさせていただいたということで、早速議題2の子どもの発達と生活、この議題に入っていきたいと思っております。

それでは資料の4-1と4-2、これがそれに当たると思っております。

なお、この後にきょう提供していただきました委員さんからのB4判の資料についてもお話しをいただきたいと思っておりますので、その順番でご報告をいただきたいと思っております。

それではお願いいたします。どうぞ。自己紹介の方を。

栄養士 座って失礼させていただきます。私は子ども家庭福祉課の栄養士でと申します。

お手元の「資料1の保育所食育全体目標」というのと、それから「保育園に通園している乳幼児の食生活の現状」をお話ししてみたいと思っております。私は、保育園の保育士と乳幼児クラスに入る親御さんから家庭の状況を伺って、入園してからスムーズに保育園生活ができるように、また食事について、問題があれば保育士等と検討しながら、どうように対応していくかを考えています。例えばアレルギーとかであれば医師の診断に基づいて、この日のメニューの中で食事の状態というか、どのようにこれを提供していくのか。また幼児、特に5歳児が中心になりますが、園庭で栽培したり、収穫したりして保育園の食事でも出ています。サツマイモの苗を植え、世話をし、焼き芋会を地域の人と交えて行う。そのときに野菜は食べると体にどんな効果があるのだとか、どういう理由で食べなければいけないというようなことを子どもたちに話しています。子どもの食にかかわることをしています。

それでは、毎日の仕事を通して日々感じていること、また最近とても考えてしまっていること、それから保育士の人たちと話し合っている、子どもの食生活の内容についてお話ししたいと思います。

順序が逆になってしまうのですが、「保育所の乳幼児の食生活の現状」という方を見て聞いていただければ大分話がわかると思っております。

最近、育児書やインターネットなどから情報を得て、知識としては大変豊富なお母さん方が多いようです。しかし、実際に自分の子どもをどうしたらいいか、ということとつながらない場面をよく見受けます。例えば暑い日に外から帰ってのどが渇く、恐らく親御さんはお茶を飲むと思うのですが、新陳代謝の盛んな乳児の場合、もっと水分が必要で白湯か麦茶を飲ませてあげることができていない。お風呂上がりも同様で、多分のどが渇いているのだらうなというのに水分補給をしていないということがあります。

面接日にお会いすると、母乳、ミルク以外全然飲ませたことがない。そうい

うことを思いつかなかったというような現状があります。反面、粉末や瓶詰め  
の果汁などは産院でもらう、薬局でもらうということがあるせいか、かな  
り早い時期から飲ませています。薄めて飲むということもよく聞きますが、  
食品のそのものの味になれてきていない時に、甘いものを飲んでしまうとい  
うことを心配するのは保育園の関係者だけのようです。

保育園の麦茶はあまり飲みたがらないけれど、家のジュースならよく飲むと  
いうことがとても多いような気がします。

月齢が進むといろいろなものに興味を持ちます。あまり好き嫌いをこだわら  
ない時期なので、そんな時に食品の幅を広げてあげることが大切な時  
期なのですが、この2年くらいよくあることで、保育園では乳児におかゆを  
出すのですが、このおかゆはお米から煮込んでやわらかいおいしいものなの  
ですが、これを口から出してしまう。ニンジン煮込んでつぶして食べさせ  
るのだけれども、それにむせてしまうというようなパターンもよくあります。  
これは食べさせるかたさ、自分の子どもに食べさせるかたさがわからずに、  
お手本としてベビーフードを買う。使い始めて見ると種類は豊富で大変便利、  
それでパッケージ、箱にまで月齢の記載があるのでそれにレンジやお湯を足  
すだけでごちそうができる。とにかく、いつのまにかベビーフードが中心に  
なってきたりするので、とても便利でよくできているのですが、どの月齢の  
ものもどろどろ、べたべた、やわらかい状態です。

保育園にも米粒あるいは、ニンジンのやわらかい繊維というか、それにもむ  
せてしまうというような状況がよくあります。園の食事ですれをつぶしたり、  
水分を少し多めにしていくと、大分食べられるようになるので、これは十分  
食べられる固さだったのに、ただ固形物になれるという機会がなかっただけ  
だということがわかります。

食品の種類についても、乳児のいる家庭は私たちのイメージでは野菜が中心  
ということになるのですが、こういうこともあまり見られません。特に今の  
季節ですと大根とか、ニンジン、白菜、ホウレンソウとやわらかく煮たり、  
細かく切ったり、みそ汁に入れたりという食材が見られません。核家族で何  
度かに分けて使うだろう野菜類があまりでてこない。また肉類より魚の方が  
食べやすく、離乳食の時のタンパク質に適しているのに、これもあまり出て  
きません。肉類であっても、野菜の煮たものにひき肉を入れるという形態で  
はなく、ぎょうざ、シュウマイ、中華丼、ラーメン、フライドポテトとい  
うものがよく出てきます。季節感を感じられないし、食べやすいものなのかも  
しれませんが、味も濃く、本当の乳児期の一時期だけなのだから、子どもに  
合わせたメニューにならないのかなと悩むところです。これは生活リズムに  
よるものです。父親の帰りを待って、食事にするという家庭もあります。

親が起きているのと同じように起きている。夜の授乳の時期は過ぎているのに、泣くと寝かせつけるのではなく、ミルクを飲ませたり、子どもが好きだからという理由でヨーグルトを食べさせたり、パン類を食べさせたりということもあります。食事のときにしっかり食べて、夜はぐっすり眠るということは自然に身につくことではなく、毎日の親の働きかけが大切だということがわかります。

また、しっかり食べる時に、物を食べないということだけではないと思うのですが、入園してくる子どものほとんどがフォローアップミルクを飲んでいきます。6カ月ごろから3歳までというコマーシャルで売られているミルクです。食事がしっかり食べられるようになれば、ミルクを哺乳瓶で飲んでいる弊害が大きいのです。子どもの方も嘔んで食事をするより、逆におなかがいっぱいになるミルクを飲んでしまいます。こんな悪循環で結果的に体重はどんどんふえている状況です。

このころは食べ物に一番興味を示すときでもあります。保育園で自分の分を食べてしまって、欲しければ隣の子どものものに手を伸ばしたりします。

また遊びの中で、かなり食事をテーマにした遊びをすることもあり、保育園では食べられない子には月齢がかなり上がって2、3歳でも刻んで提供したりするのですが、「刻み刻み」といいながら運ぶまねをしたりという姿も見られます。食事に非常に関心を持つ時期にきているのだと思います。このときに季節の野菜や果物が入れば、もっと健康的な体がつくられるのだらうとも思う毎日です。

だんだん情緒面でも成長し、食べ方も幼児に近い食べ物が食べられるようになる。食事の様子を見にいても本当に喜んで食べている子と、余り集中して食べられない子とがかなりはっきりわかってきます。メニューにおいてもカレーとかフライ、空揚げなどが人気のメニューです。逆に野菜や煮物などは苦手などになっています。ニンジン、しいたけ、ゴボウなどの煮物はかなり時間がかかり、食べさせる方もかなり力を入れているメニューの1つなのですが、以前は煮物に副菜として、おひたし、いわゆるホウレンソウのおひたし等を以前はつけていたのですが、こういう野菜のメニューを一緒に出してしまうと保育士の方は「一口だけ食べようとか」、「もぐもぐするとおいしいよ」という働きかけをしているのですが、それでも食べるのにかなり時間がかかってしまい、今は煮物のときはみそ汁と果物だけというメニューで一品に集中できるような形で出しています。一口食べるとか、苦手な物食べてみたことがないものを食べてみようとかという働きかけはかなり大事だと思うのですが、頑張っ

食べる野菜と同じ感覚で野菜ジュースを飲んでいるという家庭が多くなっています。ほかのジュースを飲むよりはいいだろうと思っているようですが、含まれる糖分の面からも野菜のかわりにはならないのですが、これはかなり子どもの生活の入り込んでいます。

子どもの集まる場所、公園と、これから話があると思うのですが、健診会場でもジュースやポテトを持参して食べたりということが見られるようになりました。食事をする場所、飲み物を持ち込んではいけない場所、大体場所の区別がなくなってきているように思います。

休日のメニューの中にも、ハンバーガーなど外食、ファーストフードがかなり出てきています。みんなで食事を楽しむという点ではよいのですが、家庭でみそ汁や御飯の用意をしている包丁などの切る音を聞いて、きょうのメニューはなんだろうと考え及ぶような生活から随分かけ離れてしまっているように思います。

活動量もふえ、保育園児は自分でよく食べるようになっていきます。お当番で「いただきます」のあいさつを促すこともできるようになる。園庭でできた作物は、とりわけおいしく食べています。ニンジン、トウモロコシ等の皮むきも興味をもってお手伝いをしてくれます。野菜や海藻類を食べた方がおなかのお掃除にもなり、風邪も引きにくくなるということもわかってきて、積極的に食べたがるようになりますが、この中でやはりおなかがすいた状況、食べることに興味がないお子さんも見られます。朝食も余り食べてこないし、あるいは、紅茶だけとか、パンを持って登園する。だからといって、お昼も余り食欲がないお子さんという子も見られます。

午前中の活動は余り元気がなく、昼食お昼寝の後、元気に遊びだすということも見受けられます。食べる事は生活の中の大事な部分で、月齢、年齢に応じた働きかけの大切さを感じます。

それでは、「保育所食育全体目標」をご覧いただきたいと思います。保育園の中で保育士たちが乳児研究会、幼児研究会でまとめた内容の食事の項目を抜粋しております。食事の内容については、厚生省の離乳食の基本を元にして書いてあります。食事の内容についても舌やあごが発達してくると、だんだん水分が多いどろどろ状態から、固形物に移行していくと思うのですが、大体座位がとれる状況になると授乳していた時期に比べ、テーブルに着きスプーンやフォークを持つことから食事にも興味を持ってきます。

家庭や地域との連携ということで、保育者は保育所の子どもの成長にどう援助できるかということを考えながら幼児の発達をpushした内容です。このように子どもの発育成長を私たちはじっくり見きわめ、毎日の生活の中で積み重ねていくということが非常に大事だということがわかりました。どこかで

つまり、違った方向に進んでしまうと、修正するのはとても難しいものだと  
いうことを痛感しています。

食育全体目標を子どもや大人にどう伝えるかを考える毎日です。

これは保育園だけでできることではなく、やはりこれを地域、生活の場面ど  
ちらかにお任せするというのではなく、日々の積み重ねも大事にしたいと  
思っています。以上です。

委員長 ありがとうございます。次の資料の4 2、それから 委員がきょう持  
ってきて下さったものとも関連をしたいと思いますので、いったん全部のお話  
し伺ってから、少しディスカッションをしたいと思います。

では、同じ立場から今度は保健婦の方にお話し伺いたいと思います。

よろしくお願いいたします。

保健婦 市民健康課で保健婦をさせていただいております と申します。

よろしくお願いいたします。

お手元に配らせていただきました資料を参考にしながら、お話しさせていた  
だきますが、始めにお手元の資料6ページの妊婦と健康事項、これは後で参  
考にさせていただく部分なのですが、ちょっとミス刷りがありますので、訂正  
願いたいと思います。

妊婦健康診査が、1回目、2回目で3回目となっておりますが、これは計と  
いうことですのでよろしくお願いいたします。

それで私も保健婦は、市民健康課でいろいろと赤ちゃんが生まれる前の母  
親教室から学校に入るまでの部分の健診とか、健康相談・いろいろな地域で  
の家庭訪問などの場面を通しまして、安心してお母さんが地域で子育てがで  
きるような支援をということでやっておりますが、平成9年度、県の方から  
のいろいろな健診や事業が委譲されました。それ以前は1歳半健診が全数  
のお子さんに会えるチャンスの健診だったのですが、それが4カ月健診、それ  
からお誕生前健診、あと3歳児健診、間には1歳半健診、一貫して見るこ  
とができるようになりました。流れとしましては、そちらの方の事業案内をご  
覧いただければと思いますが、市民健康課のほかに県保健福祉事務所のアレ  
ルギー予防教室ですとか、思春期セミナー部分はまだ県の方の保健婦でやっ  
ているわけです。それから、市の社会福祉課療育担当の方とも協力をしまし  
て、各健診等でちょっと発育の言葉の問題ですとか、一つのやりとりの中で  
ちょっと気になるかな、このままいけば当たり前の発達がちょっと気になる  
なというお子さんはフォローアップ教室に誘って集団遊びや保健指導しなが  
らわんぱくグループというような教室をしております。

それで簡単に保健事業の進め方について、ちょっとふれさせていただきます  
と、主治医で個別に行われるのが4カ月健診・お誕生前健診で、その間に

6カ月児育児教室、これは離乳食が始まりまして、軌道修正が必要であればこの辺でしていこうというねらい、それから今大変子どもさんが少ないので、地域ごとに6カ月の育児教室をやっているところですが、半数ぐらいのお母さん方がいらしていただいているところです。

栄養士の離乳食の話とこれからどういう予防接種を受けていかなければいけないかというようなお話しと保健婦のワンポイントアドバイスと、後半はグループをつくっていただいて地域ごとにお友だちをつくっていただく、ということも大きな目的の中でやっております。

それで後、またレジメの方の健康診査に戻りますが集団健診としまして、従来からやっております1歳半健診、それから歯科医師会の協力を得まして、2歳児歯科健診で、それから3歳児健診というこれらの事業を通しまして、きょうはちょっと感じていたものの実体について、数字の方はお手元の資料を後で参考にさせていただければよろしいかと思いますが、この辺で結構気になるかな、それからお母さん方から相談を受けるようなことをちょっとお話ししたいと思います。

それで、親御さんがいろいろな教室ですとか、各行政センターの健康相談で訴えられることは、やはり食べること、それから睡眠のこと、保育との関わりのこと。そんなふうな大きな疑問で、やはり相談を受けるわけですが、離乳食が始まった食の部分では、今保育園での食の部分がお話しがあったわけですが、それらと全く同じ傾向でして、離乳食が始まる前のミルクの飲みですと少ないのではという不安が訴えられたり、それから離乳食が始まる時ですと、これでいいのだろうかというような、何かうちの子だけが特別具合が悪いというか、順調ではないのではないかと、不安に駆られるお母さんがいらっしゃるような感じがします。その辺グループワークをしながら、ちょっとだけ生まれた日が早く、1つの課題が乗り越えられていったお母さんの、そういう経験な話や話が聞けますと、そういう場面を設定するだけで問題解決できるかなというふうな感じがしています。それで離乳食がこれでいいのだろうかという次には今度、母乳を与えているお母さんは、そろそろ母乳をやめないと何か困ったことがあるのではないかと。断乳、卒乳ともいいますが、卒乳をしなければいけないのだろうか。とかそういうようなことの時期の相談を受けてきました。

赤ちゃん時代から幼児期に移るときの食事の面では、むら食いですとか、小食とか、遊び食べですとか、その家庭の過ごし方、生活リズムが反映してくるものが相談に出てきているというふうに思います。

例えばお父さんがとても帰りが遅くて、うちの場合にはどうしてもお父さんがお風呂に入りたいといっているから、入れてもらっているのだけれどとい

うことで、とても赤ちゃんでは考えられないような睡眠の状況で、下手をすると12時過ぎ、2時過ぎという方もいらっしゃるって、とても気になるというところもございます。今新聞紙上の求人欄を見ましても夜間のいろいろなところの募集も大分多くなったように思いますが、お日さまが出てからお日さまが沈むまでの自然に沿った、そういうリズムからちょっと離れていくような傾向になるような時代の相談を受けるという感じがしております。

それから夜泣きですとか、なかなか朝起き切れない、目がさめ切れないなど自律神経の中の起きているときの神経が、優位に働きにくくなって身体の症状と一緒に現れているなどと思われること。それと合わせて免疫力が落ちて、いろいろと身体症状が出てきたり、アトピーの問題のことなど生活リズムが当たり前の時間に戻ったら改善するなどと思われることの相談を受けています。人との関わりの中では、お父さん方が転勤をどうしてもせざるを得ないという中で、お母さんは社宅の中に入って、あるいは転勤して転入してきていらしたというばかりで、どのようにやって子育てをしていったらいいのか。子ども自身の友だちはもちろん、お母さん自身も友だちがいらない。それで鎌倉の場合には地域によって行政区によって大変特徴があるのですが、旧市内の場合は特に数十年前というか、大分前から子どもさんが少ない。それで社宅の多い深沢地域ですとか、大船とかでも、友だちがいらないという相談を最近受けます。

それから、お母さん自身、自分が育つときに自分のお母さんと何かうまく親子関係が持てなかったことが、自分の中で影響していて、自分の子どもに自信を持って子育てができない、病気まではいっていないのですけれども、ちょっと不安を訴えられるというお母さんがいらっしゃいます。

それから子どもさん自身が体の中に、何かちょっと何かひずみのようなものがあるって、他のお子さんの何倍も手がかかるとか、落ちつきがないですとか、何かちょっと発育がとか、相談を受けることがあります。その中で4カ月健康診査で、当たり前の体重身長だったのに、6カ月の育児教室のときに身体測定をすると、そのときに何かうまく具合にいてないなと、母乳の出が悪いのかな、それから離乳食がそろそろ始まるころだけでも、ちょっとうまくいかないのかな、中にはちょっとお母さんがお母さんとしての役割というか、子どもははぐくむものというか、子どもの当たり前の発達のだんをちょっとよくわからないで、お母さん中心に動いている方が、栄養不足ですとか、寝不足とまではいかないのですけれども、取り組まなければいけない弱い立場の子どもさんに対して、育児の手がいていないなと思うことがあります。そんなふうに健診とか各地域の健康相談とか、子育てグループのところで呼びいただきまして、保健婦が季節に1回ぐらいお邪魔できたらと思ってお

るのですが、主任児童委員さん方が中心になっていたり、町内会が中心になっているような組織で相談とか、健康等とかのお話をちょっと、というふうにいただいておりますとそういうふうなことが見えてきます。この資料の中で4か月健康診査というところに出てくるかと思いますが、その辺のところ37ページのところ、ほぼ9割ぐらいの受診ですが、まだ全数ではありません。

それからお誕生日健診も同じような状況です。個別の状況はそういうふうですが、行政側が設定したところに来ていただいて、集団で受ける場面、そういうところの受診率は月によって、その年代によってもちょっと差があるようですが、ほぼ9割の方が受診していますが、5%ぐらいの変動はあると思います。1歳半健診の方はそんなふうな感じですが、3歳児健診も同じような感じですが、やはりそれでいらっしゃらないお母さん方子どもさんと、どうしていらっしゃるのかなと大変気になっているところなのですが、こういうような未受診の方々には4か月健診のときに上がってきた結果を見まして、ちょっと気になるところは先生の方にまた連絡したりとか、またお母さんに連絡したりしてはいますが、もちろんですが、いらっしゃらない方はどうしてかということは、まだこのところではプッシュはしていませんが、4か月、お誕生日にも来ていない方には、幼児期の節目を乗り越える1歳半のときには電話をこちらからさせていただいています。

それでもいらっしゃらないお母さんのところにはこちらから家庭訪問させていただいて、それで全数把握をするように、そういう方向でいるのですが、どうしても転出入というか、そういうところではないところか若干出てきたりします。大体考えられるのがお伺いしてみると都合が悪かったという方がある月では15名ほど、未受診の方半分ぐらい、それからかかりつけの先生に行っていますから行きませんでしたとか、ちょっと障害がありになる方であおぞら園とかに行っていれば、あえてこちらにいらっしゃるようにはお誘いはしていません。他の機関でという方が1名か、2名いらっしゃる。それから、うっかり忘れたという方がやはり何名か、それでお手元の資料にも対象月齢が書いてありますが、例えば1歳半健診ですと、波を乗り越えるのは、1歳9カ月で言葉がいっぱい出てきますので1歳9カ月から2歳まで受けられような幅を持たせています。前からちょっと気になるお子さんはまた電話しながら、幅を持たせて翌月というふうにもしています。

保育園にいらっしゃるお子さんが未受診という場合は保育園の方での様子がどうなのかということ子ども庭福祉課と連絡をとりながら状況を教えていただいています。中にちょっと気になるのですが、1年に1人、2人ぐらいですが、ニードが全くない、健診も受ける必要性を余り感じていない

ようなお母さんがいらっしゃるということがちょっと気になるところです。それは家庭訪問の中で節目節目でお伺いして、お母さんもきっと持っていらっしゃるのではないかなという不安を、一緒に考えさせていただきながら、お母さん自身の不安解消のお手伝いをさせていただいています。

それから3番目の家族と地域の関わり、核家族化、少子化の影響について説明させていただきますが、私どもは母親教室をやっておりますときに、グループワークでおふろの入れ方を実習するのですが、この中でおふろに入れる場面を今まで見たことがある方いらっしゃいますか。と私が一緒にさせていただくときはお聞きするのですが、そのとき見たことがないという方がほとんどなのです。兄弟が3人、4人で育ったお母さんは兄弟の1番下がおふろに入るとき見たとか、あるいは自分の兄弟の子どもさんが出産したという方がたまにはいらっしゃいますが、赤ちゃんを見たことがない方がほとんどです。昔は子どもというのはどういうふうな道筋を通過して行くかということを知っていた母さんが多かったと思うのですが、今はなかなかその辺を知らないままお母さんになって安を感じているようなお母さんを見受けられます。お誕生前健診と1歳半健診の状況がどうだったかといえますのは、見えない部分での健診です。個別の健診のときに、人見知りある・なしという先生から問診でお聞きすることになっているのですが、それが果たして人見知りがないということの問題にしているのだろうかどうかということが疑問に思えたのです。それで一応人見知りは、自分よりほかの人に対する関心の認知の発達を意味するもので、それが健全となっている方なのかどうかちょっと見てみたいと思ひまして、1歳半健診の問診項目の対人関係の項目、「痛い思いをしたり悲しいときもお母さんにしがみつきますか。」とか、「やりとり遊びを喜びますか。」「人のしぐさをまねしますか。」と。それから理解の項目、「お手でどれ。」とかと聞きますと、こことか、「絵本はどこですか。」で指さしたりとか、「何か持ってきて、ということがわかっていますか。」というような項目とか。あとは言葉、意味のある言葉を5つ以上話せますかというところは聞きますが、人見知りをしなかったことが問題というわけではないのですけれども、しなかった群の中のお子さんに理解、発語に「いいえ」のつくことが人見知りありに比べて多くありました。

それから保育園の方で、子ども同士のやりとりはあると思われるお子さんは人見知りはありました。それから兄弟がいる、第一子は少ないのですが、第二子、第三子の立場にいるお子さんは人見知りが多いということがわかりましたので、やはりこれは子ども同士のやりとりができる環境の大切さがあるのだなというふうに思った1つです。それでやはり少子化による影響というものは、地域でもいろいろと子育てをする上に当たり、子どもは当たり前の

ように発育・発達をして学校に入るまでというところが、どこかでその辺をカバーしながら環境を整えていく必要があるのかなというふうには思っていますけど。それでまた転出入が多い中で、若年のお父さん、お母さん、何かご自分自身がまだ発達課題を抱えながら親になって、親に完全になっていないというようなお母さん方がたまにいらっしゃったりして、その中で今少年問題ですとか、虐待問題とか、マスコミをにぎわしていますし、私たち大人が気になるところなのですが、鎌倉市内では昨年度は11ケースの虐待の事実があったと聞いております。今年度の上半期は3ケースあったと聞いておりますが、特別の方がそういう虐待をするということではないなというふうに感じることがあります。やはりだれも自分自身の何か揺れがあったり、心の何かこうとても不安感とか、挫折があったりするとそうなるのではないかなと、この辺のお手伝いをご主人なり、あるいはおじいちゃんおばあちゃん、それから地域、それから行政、そういうところで何かやっていかなければいけないなと。特に先ほどに返るのですが、健康相談をしながら、あるいは健診会場の問診場面でお母さんに会いながら、家事とか、育児というのはなかなか認めてもらっていないお母さんが、私は認めてもらっていない。十分認めてもらえたら次自分が人間としてというか、その発達課題、お母さんの年齢18とかからお母さんになって20、30の生産年齢に自分自身が発達をしていくのですが、その分今度親としてというか、十分認められなければなかなか次の課題にいけないのではないかなというふうに感じたりしております。その辺のご主人が、子どもさんを抱えながらお母さんをも一緒に抱えながら安心させてあげること。それから地域でも子どもが十分やりとりができるような環境づくり、その辺で行政がやっていかなければいけない役割というものもあると思いますので、これからも地域の皆さん方と一緒に子どもさんが健康で発育・発達ができるように一緒に仕事をさせていただけたらと思っております。以上です。

委員長 ありがとうございます。それでは引き続き 委員さんの方から、資料に基づいてご発言いただきたいと思えます。

委員 ご参考になればということで、番号が振ってあります。わら半紙でA 1、A 2、A 3、それからB 1、B 2ということで、ちょっと元が薄いもので読みにくいところもあるかと思います。特に全部読まなければいけないということではなくて、きょう栄養士さんですか、いらっしゃっていただきましたように、子どものかかわる場面でもって食生活がどうなっているのか。ということでご報告をいただきましたが、私はご存じのとおり高等学校の教員をしております。それで今高等学校でも、ごめんなさい、報告するときに別に委員としてではなくて高等学校の教員としてお話しをした方がわ

かりやすいでしょうから、そういう立場で少しお話しをさせていただきたいと思えます。

ここに出してきましたAとBのものというのは、2人の子どもです。生徒、年齢は17だと思えますけれども、1週間の食生活の写真を撮って記録してもらったものです。手元に元となるレポートがあるのですが、全部こういう具合に写真を撮って、写真暗いものがあるから分かりにくいでしょうが、こんな具合に食事の一件一件が写真になって出てきています。写真見をみますと書いてあるよりも、その実態がかなり明確に見れるのではないかと。それでなぜこういう形で出すかということ、子どもたちがどういうふうな食生活をしているのか。特に高校の在学ぐらいですと、もう卒業して1年、2年、あるいは5年以内にはお子さんを抱えるというケースが非常にふえているというのが実態だと思えます。その中で子どもたちが一体どんな食生活をしているのか、ということの少しかいま見ることができないのではないかと。そして、この子たちは決して特殊な子ではないというところが大きな特徴だろうというふうに、子どもたちに私は授業の中で自分たち自身の生活、それから今後どうやってその後の生活を組み立てて生きていくのかということ課題とする中で、自分たちの食生活を見つめようということを通して、あるいは食生活そのもののあり方を通して、という形で授業を行っています。その一環の中でこの2人の子にはレポートを書いていただきました。2人ともではどういう子なのかということ、1人はお医者さんの娘さんです。もう1人はごく普通のご家庭の方ですけれども、そういうところですから、経済的にはそんなに苦しい、そういうご家庭ではありません。ただこのお子さんたちは特殊ではないのですけれども、よく欠席をするという子どもたちですがそれも今ごく普通です。全然珍しいことではありません。何か理由があってということではなくて、よく来ないという子どもたちです。具体的に例を見ながら見てみたいというふうに思うのです。Aの子が3枚あると思えます。それでAの子、最後に自分でやってみながら感想を書いています。ちょっとごらんになってください3枚目です。Aの3の子ですね。こういうふうになっています。そのまま読んでみましょう。「私はこの1週間自分の食生活調査をしてみても、いままで気づきもしなかったことがたくさんありました。1つは3食ともきちんとした食事かとれていないことである。例えばきちんと3食とっていたとしても、ほとんどがインスタント食品または冷凍食品で、栄養のバランスがとれていません。もう1つは添加物の摂取量が1番多かったことです。料理をするときも、材料などの表示を見ると必ずといっていいほどたくさん書いてありました。だからといって添加物をとらないようにするというのは絶対に無理なので、適度に摂取するように心がけたいと思いま

す。」こんなことが書いてあります。改めて見てみたときに、自分の食生活がどんなふうになっているのかということで、まず3食とっていないという例で見ますと、この子の場合に1週間7日間やっていますが、A 1のプリントを見てください。A 1の左上、第1日目です。朝食なしです。2日目真ん中当たりになります。これも朝食なしです。そして、A 2、A 2の右の上ぐらいになりますか、真ん中の上になります。これも朝食なしです。それから、A 3の右上この日も朝食なしです。つまり7日間のうち4日は朝食を食べていないのです。こういう食事になっています。さらに写真をごらんになっていただきますと、書いてあることよりも写真の方がはっきりしてきますので見ていただくと、A 1です。A 1の中でそこにどんなものがあるか見ていただければわかるとおりであります。これが一食なのです。A 2を見ていただいても、その中に非常に貧しい食文化の実態が出ているのではないかというふうに思います。それでA 3を見ていただくと、定番といってもいい食事が入っています子どもたちにとって、カップメンです。こんな具合に、食事の内容というには非常に貧弱になってきている。そして当然のことながらこの中には現われていませんが、家族でもって食事をしているという実態ではありません。もちろん高校ですから、小さいころのように家族でという具合にはならないかも知れませんが、家族で食べていると、そういう場面が浮かんでこないというのが実態です。さらに食事はとらないにしても、きちんとした時間に毎日とっているのかと。夕食のところでちょっと注目をしてみたいというふうに思います。1枚目A 1、夕食が夜の7時です。その次2日目が18時、3日目20時です。4日目2枚目になります21時、5日目21時、6日目ですか、6日目が夕食は次のところにありますね。A 3のところにあります20時、その次の日が19時、その次が20時という具合に非常にまちまちな時間で食事をとっているということなのですが、つまりおなかのすいたらばすいたときに食べる。決まった時間に一定の食事をきちんととるということではないわけです。この中には間食等が入っていませんが、これ以外にかなりの量の間食が入ってくるという実態があるというふうに思います。先ほど出てきた実態とも非常によく似ているところがあるのではないかというふうに思います。

Bの方ごらんになってください。もう1人の子です。この子についてもほぼ似たような傾向が見られると思います。この子は書き方が余りまめではありませんが、先ほどと同様にB 2の方をちょっとごらんになっていただくと、自分の食生活についての、自分で調査してみた結果の感想が書いてあります。ちょっとごらんになってください。こういうふう書いてあります。「こうして写真等を撮ってまとめてみると、私は夜一応食べるのですが、朝や昼は食

べたり食べなかつたりということがありました。」これは夏だったのですが、「今夏休中ということで中途半端な時間に起きてしまうことに問題があるというふうに思います。例えば朝10時には起床して、11時に朝食をとるとお昼にはおなかがすいていないとなってしまいます。また私は学校がある日も余り朝は食べないので、朝食をとらなくても平気になってしまっているというのがあります。そして私はお菓子が大好きなのでよく間食をしています。朝食を9時にとって、11時にポテトチップスを食べたりすると昼食は食べられなくなってしまいます。」という具合に子どもの食生活、およびそれにかかわる生活の実態がこういうところから見えてくるのではないかというふうに思います。同様にB 1と、B 2、その写真をざっと見ていただだけでも食生活が一体どういうふうになっているのか。ということが見えてくるのではないかというふうに思います。それで最初にも申し上げましたように、子どもたちがこういう食事がごく普通だという感覚になっているのです。子どもたちに自分たちの食生活を授業の中で課題として調査をさせますと、こういうことをここ数年はいつています。コンビニショという言葉が子どもたち使っているのですけれども、つまり食事の大半をコンビニに頼っているのです。お昼御飯あるいは朝御飯も、コンビニに行っておにぎりを買って食べると、あるいはコンビニでのお弁当を食べるという具合に食生活の少ない部分 - 恐らく実態としては1割りから多い子では3割り、6割り以上いるケースがあるかと思いますが - をコンビニでもって食事をする。したがって買って食べるわけですから、どういうバランスをとってどういうふうな食事をするのがいいのだなということではなくて、やはり自分の嗜好に合わせて好きなものを食べると、あるいは予算に合わせて食べると、こういう食事をする、こういう生活をするということが実態になっているのではないかと思います。全体ではもちろんないわけですが、もちろんきちんと食生活をされているお子さんも少なくないわけですが、ただ総数としては無視できないぐらいに、こういった食事が若者たちの中で広がっていると、そしてそれを支えているのは実は家庭ではなくてコンビニであると、これもまさに実態ではないかと、こういう実態、やはり踏まえながら私たちは子どもたちの生活を見ていかないといけない。そうするとこういった食生活をしている子たちがどういうことが、さまざまな問題点が出てくるのかということが考えられなければならないのですが、高等学校の現場にいますと、いろいろなことが出てきます。ここ数年で一番多いのは、生活ができていないという子どもたちが非常にふえています。生活ができていないとはどういうことか。例えば掃除をするにしても掃除ができないのです。教師がつかなければ全く掃除はできません。子どもたち同士で話し合って物事を決める。

これもできなくなってきました。これは底辺の学校だけではなくて、ここ2年間の間で進学校の子どもたちにもそういう現象があらわれてきております。これは非常に大きな特徴、傾向ではないかというふうに思います。

ではここは児童福祉審議会ですから、児童福祉審議会ということで見てみますと、こういった具合に子どもたちを抱えている地域社会の実態、子どもたちの食を通じての子どもたちの食文化、食生活の実態を見ていくと、やはりこれは公の機関がきちんと実態を把握するという中で、どういうふうにこれをとらえていくのかということを考えなければいけない。そういう段階になっているのではないかと思うのです。これまでのここの審議の中で、確か

委員がこういうことをおっしゃっていたと思います。非常に保育園の中で困った実態があるのだということでお話しになっていたと思います。家庭の中で食事がきちんとれていない、そこで保育園の中で食べている給食が本当に1日の糧になっている。私もまさに高等学校の現場にいますとそのとおりだというふうに実感をいたします。高等学校で給食なんてやっているところはないわけですが、給食の要求というのは教師の中にも、それから子どもたちの中にも切実な要求としてあります。そういった意味では、やはりこれから保育園、幼稚園、それから小学校も含めて、給食を鎌倉の各小学校では学校ごとに給食はされているようで、それはすばらしいことだというふうに思いますが、やはり公のところできちんと食生活を見ていくということが必要になってきているということを示しているのではないかというふうに思います。後はご質問とか、論議の中で深めていただければというふうに思います。失礼いたしました。

委員長 ありがとうございます。

それでは4 1、4 2、それから 委員の提供してくださった資料に基づいて、少し自由に議論をしていきたいと思うのですが、かなりきょうは食事のことも3人の方から共通して出ておりましたので、そんなところからどなたか。何かご意見や、ご質問いかがでしょうか。

委員 今 委員の持ってきてくださった、これを見て本当にびっくりしてしまったのですけれども、高校生だと普通おうちから通っていますよね。これお子さんから見たらこういう食事だったということですから、親御さんは例えばお昼とか、朝はちゃんと用意していたのにそれが嫌いだったから食べないで自分でこういう朝菓子パンを食べてしまったとか、おにぎりを夕飯にしている日もあるのですが、そういうおにぎりもお母さんがつくったものなのかどうか。例えば、コンビニが近いので自分で親がつくったものが嫌いだったら、行ってしまおうというような年齢も考えられるのですけれども、親御さんたちがサンマとか、おみそ汁とか、御飯というのはお母さんがつくったな

という感じがするのですけれども、その後の食事というのはなんかお母さんの姿があんまり見えてこないような気がするのですが、そういうような点で親御さんがどうしていらっしゃるのかが、何かすごく不思議になってしまったのですけれども、朝御飯にしても、お昼はお弁当とかを持っていったりはしないのですか。お母さんがつくったお弁当を。何かちょっとびっくりしてしまって。

委員

当たり前質問なので、いや本当に当たり前質問なのですよ。でも当たり前前ではない状態になっているので、これを見ていただくとわかると思う、もちろん全体の中でこの子たちは2人の事例ですから、最初に申し上げたように特殊というわけではありません。今の一般的な高校生の中で特殊ではありません。大体調べて見ますと、恐らく相当の子、特に女子が多いと思いますけれども、朝おにぎり、コンビニのおにぎりという子は多いです。非常に多いです。それはご家庭でどうなのかというとそれはわかりません。どうでしょうね。この子たちについては見ていただくとわかるように、母親、あるいは保護者の姿見えてこないですね。見えてきません。全くそのとおりです。見えてこないというふうに思います。つまり家庭、家族があるのだけれども何とっていいのでしょうか。機能していないといいますか。そういうところはあるのではないかとこのように思います。それから、この子たちは嗜好もあると思いますけれどもそうですね。実態としては、子どもたちがむしろ好んでそういう具合にコンビニ等でカップめんを買ったり、おにぎりを買ったりして食べているという側面がかなりあるというふうに、とらえていただくといいと思います。それは多くの学校でそういう傾向があるというふうに聞いています。それで例えば、うちの私が勤めているような学校は底辺の学校ですから、非常にそういう比率は高くなるわけですけれども、それでもお昼に自分たちでお弁当を持ってこない。大体そのお弁当は自分たちでつくる子はごくわずかです。母親が大体つくっているケースが多いと思いますけれども、それで持ってこない生徒は6割ぐらいに達していると思います。ですからその子たちは途中でどうしているかというと、大抵がコンビニのお弁当ですね。あるいはおにぎりを朝買って置いて、とって置いて食べるということが実態だというふうに思います。

委員長  
栄養士

これ栄養士の　　さん、こういうの見られて何かコメントがありますか。  
例えば私がこれを見たら、感想を書いている子にいいことに気がついたから、家では御飯を炊いてみたらとか、買うなら食パンを買ってみたらいいのではないのか。そういうふうな助言をしたいと思いますが、ただそれはやはり保育園でもあることで、私も高校生の子どもがいるのですが、お弁当は一応持っていけますし、男の子の場合もっと食欲があるし、スポーツなんかして

いればコンビニだけでは足りない。だから、女の子だからということがあるのか。でもやはりコメントとすれば小さいうちから食べる時間にきっちり食べていれば、こういうものを食べて違和感を感じるのではないかなというふうに思っています。

幹事

今のお話しなのですけれども、私お話し聞いていて普通の状態だというお話実感としてよくわかるのです。それで国の今確か40だと思うのですが、栄養調査の傾向の中で、14歳から40歳ぐらいまでがカルシウム不足と鉄分不足と出ています。今問題なのは、いわゆる栄養の摂取量は多いのですが、飽食の時代で。ただし、栄養素の部分のバランスある確保ができていないというのが国の方です。これは今国の方で確か40だと思うのですが、したがってカルシウム不足が当然のことながら老年期を迎えると骨粗鬆症とか、そういうようなものに結びついているというのは大きな問題になっているわけです。

それと合わせて平成10年の調査なのですが、神奈川県で実はお手元に健康日本21の部分の資料が出されていると思うのですけれども、神奈川県も今現在、健康日本21の神奈川県計画を今策定するというところで、それに先駆けて、平成10年に栄養関係の食生活に関する調査をしたわけです。その傾向の中でも今おっしゃっている部分に該当する大体14歳から、40歳、したがって先ほど青少年に見られるということを申し上げたのですが、あえて申し上げれば、成人にも見られてきているという実態がもう猶予ならない時代にきているということは理解しなければいけないのかな。データの的にはそういうことがあらわされている。

それで原因は何かというと、1つに考え方の中では今の世の中、社会が余りにも特効薬を求め過ぎている。便利さを求め過ぎている。いわゆるコンビニエンスを求め過ぎてしまった。それで外国の例を見ますと、10年前でしたか、イタリアでローフード運動というのがいわゆるファーストフードに反対する、対する言葉として、ローフード運動というのが出てきました。日本にもある程度そういう部分が定着しつつあるのですが、食生活そのものを何かの目的のためにあるのではなくて、生活を豊かにするための1つの動作であるというふうに理解した運動なのですが、どうしても私たちは便利さを求めて、スピード感を常に求めて、そういうような状態が出てくると、社会全体が便利さを求める中で。そういう部分になってくるとやはり考え方というか、文化というか一人一人が考えていかなければならない問題、そういう意味で健康日本21の問題提起が今年の4月からスタートしたということで、ご理解いただければというふうに思っています。

委員 委員に質問なのですけれども、 委員の学校は学食はあるの。  
委員 ないです。  
委員 ないの。Aという子は1週間のうちで根菜類が極めて少ないですね。学食のあるところはこの点が幾らか救われるのではないかなと思うのだけど、それだけに学食のない学校というのは学校で健康管理、食事についての管理をこれから徹底しなければいけないのかなというふうに感想として持ったのですが、その辺は学校での体制というのはどうなっているのか。

委員 よろしいですか。高等学校で食堂がある学校は県立高校では定時制のある学校以外はないというふうに、ですからほとんどすべての学校がないというふうに考えていいと思います。私立の学校では例えば大学を設置している学校、そういうふうなところでは生活協同組合等が入って、食堂がある学校も若干あろうかとも思いますが、やはり圧倒的な多数9割以上は学食を設置していない。つまり日本の教育制度の中で、戦後の新制の小学校の中で、小学校のところは給食、これは食生活指導の一環としてもたれて当初来ましたよね。それで中学校でも給食、ただ中学校の給食は牛乳等の給食という形だろうというふうに思いますけれども、そういう具合につくられてきて、高等学校ではそういう食生活指導という観点は率直に言って学校教育の中には存在しないというのが実態だと思うのです。それではどうなのかというとそれぞれ家庭科の先生とか、あるいは理科とか、あるいはそれぞれの先生方が、これは大変だぞということでさまざまな場面で子どもたちに話しかけたり、あるいは子どもたち自身に問い直させたりということを行ってきている。そういう個々の努力で補われているというのが実態であって、それ以上に先ほどもコンビニの問題が幹事の方から言われていましたが、とてもではないけれども追いつかない実態。それがもう標準的な実態でしてそれでは子どもだけかというとな本当はそうではないのです。私もそうです。この1週間例えば昼食はとれません。1週間7日のうち4日間は昼食なんてとる時間がないのです。ですから1日本当に一食ですね。それで徹夜も何日かある。これが実態です。ですから、食生活だけではなくて先ほど保健婦さん、あるいは栄養士さんの方からお話しがあつた中で、私ここが1つの鍵になる問題かなというふう思うのです。いままでの論議になっていたことでもやはり大人の生活を子どもたちに持ち込んでいる。私、夜出張して夜中の12時、1時とか帰ってくる時よくあるのですけれども、そうするとあいているお店ありませんから、必然的にどこに行くかという、ファミリーレストランというところに行かざるを得ないのです。私嫌いなのですが、行きますとどういうこと見られるかと、その時間帯で乳児ですよ。乳母車を抱えたお父さん、お母さんがそこで食事をしていると、子どもは起きているわけです。あるいは小学校低学年

の子がお父さん、お母さんと来ているということは必ず見られると、こういう現象があるのです。つまり大人の中で大人の生活が子どもの中に持ち込まれて、ですから子どもたちも寝る時間は今実態すごいというふうに思います。確かにお父さん、お母さんの仕事の実態あるのだけれども、やはり子どもを中心にした社会をつくっていかなければ、これはいけないのではないかと、もっとそういう点では私の労働実態からいっても、子どもを中心にしてもっとそういう夕食がとれるような時間には帰す。そういうことを法制化するか、そういうことをしていかなければ、まさに子どもたちが将来を担う子どもたちがどういうふうに育っていくのか。本当に危惧される状況があると。それでやはり子どもたちを変えるには大人たちがどのように子どもを中心にした社会にしておくことができるのか。これを考えていかなければ、これからの高齢化社会をつくっていくことはできないというふうに思います。

委員長 子どもたちの食事もそうですが、いまでの議論の中では幹事の方から、40というお話があって、実は親の食生活というのもやはり気かけなければいけないかと思えます。まず 委員。

委員 私、不登校の子どもたちのカウンセリングルームでかかわっているのは金曜日、毎週金曜日なのですが、そのときに必ずお昼をつくるようにしています。それで以前は3年前の、最初始めのころはお昼何かもってきてね。と言っていたのです。それで持ってくるものを見ると、やはり途中でコンビニでおにぎり買ってくる。後マクドナルドのハンバーガーを買ってくる。お弁当を買ってくる子は一人もいなかったのです。それでえーと思って、それで私感じたのは共通してやることなのですが、みんな小食余りたくさん食べないこと。それから食べ物について全然何ていうのですか。感動がないというか、積極的でない食べることに。それでとても不思議に思ひまして、それからああそうかと思って、私必ずつくっているのですね今。それで何をつくっているかという私の好きなものをつくっているのです。きのうは金曜日でしたけど、主食は御飯、おにぎりと後野菜の煮物、お肉が入った煮物をつくったりとか、後は野菜中心の、どうしても私好きなのでつくってしまうのですが、最近は何かえーと最初、私はごく普通の家庭料理をつくっているのですけれども、何か食べたことがないというか。不思議な感じで食べなれていないというのですか。それで嫌いなものが実に多かったのです。けどちょっとおもしろいから食べてごらん働きかけをして、ちょっとずつ何か食べるようになりましてけれども、まだ言えるのは食が細い。だから本当に5、6人いてもご飯3合で余ってしまうぐらいなのです。それが不思議だなと思っています。それから、いまだに私はハンバーガーしか食べないといって、ハンバーガーしか持ってこない子がいます。それでお家で何たべているの。と聞くと、お

母さんのつくった夕飯は食べているけれども、いわゆる普通の御飯、おみそ汁をおかずというのは好きではないのです。それでどうしてと聞くと、いや自分でもわからない。と言っている子が1人います。だから、本当に栄養士さんがおっしゃるように小さいころからの、食、本当に影響しているのだなとつくづく思います。これからどんどんつくってどんどんびっくりさせて、どんどんもっと量を食べてほしいと思う現状です。ちなみに子ども達は20歳前後です。

委員 栄養士さんに聞いた方がいいと思うのですが、いろいろな食生活や相談内容の変化ということおっしゃっておられましたが、いつごろからそういう変化が見られるようになってきたのか。調査をされてずっと蓄積されているかどうかよくわかりませんが、いつごろからそういう変化が顕著に見られるようになってきたのか、ということがもしおわかりでしたら、教えていただきたいのですが。

栄養士 直接お母さんとお話しするのは先ほど見もお話ししましたように入園時とか、特に0歳、乳児のクラスお子さんなのですが、「あれっ」と思ったのは3年前で、もう今年の4月のときは、ああやはりそうか、というように慣れてきてしまったというところではあります。それで3年前から「あれっ」と思うようになって、そのころちょうど出回っているベビーフードを自分も食べて、研修会とかで調理をして一緒に食べてみて気がつきました。先ほどの中でも話したのですけれども、この4月はほとんど全員フォローアップミルクを飲んでいたし、ベビーフードを使わないという家は2件ぐらいだと思います。

幹事 健康日本21の方の関係で、私も県の委員やっています関係で議論している部分なのですが、歯科医師の報告によると虫歯が急激にふえたのはコンビニと連動している。いわゆるファーストフードと連動しているという研究が発表されております。ちょうどその時期から、いわゆる虫歯の発生率が高まる。それでまた別な議論で栄養士さんなんかの部分での議論としてはやはりファーストフードとの関係の時代からきているということで議論はされております。したがって、40年代からということでご理解いただいた方がいいのではないかなと、それが急激にきているわけではなくて、そういう時代からはいわゆるコンビニが悪いというわけではないのですが、ファーストフードが悪いというわけではないのですが、その時代とちょうど符合して諸現象が生じてきているということで議論はされております。

委員長 保健婦の　さん、どうですか。

保健婦 食事の面ですか。

委員 それも含めていろいろな相談内容に変化が見られているということおっしゃっていたので。

保健婦 実私、地域の方をもっていましたのですが、異動で違うところで地域をもたないところで今年戻ってきて2年目なのですが、そのこのところを5年間やってまいりまして、それで戻ってきましたら大変こういう状況が目についたということで、その間こういう状況はいつぐらいからかと同僚に聞くのですが、やはりこのところ特に、例えば親子相談というフォローアップ事業ということで実施しているのですが、その辺の内容は子ども自身は成長していったりクリアしていく問題でも親自身がまだ問題を抱えていて、どうしても心理の先生方のところにそういう場面を設定するのは悪循環になりつつあるので、そういうのだから、質が変わったということで、私がちょっといなかった5年間の多分余計見えたのが、平成9年の事務移管がされた段階で見えてきたのかも知れません。そういう段階です。

委員 保健婦の先生にちょっと伺いたいのですが、37ページのお誕生前健診の受診率が年々下がってきているのは、これは何か原因があるのですか。それから、1歳6カ月健診の受診率もちょっと下がっている。その辺何か理由があるかということ伺いたいので、それから、最初のページのところに利用計画というのがあって、妊娠してから出生してから別々と一貫性のある対応を受けている子はいいのですけれども、最後にちょっと説明がありました転入者の対応について、特に若年夫婦の対応についてどのように現在対応になっているのか、その辺を聞かせてください。

保健婦 お誕生前健康診査の受診率のことですが、それに関しましては分析をいたしませんので、今後の判断にさせていただければと思いますが、医師会の先生方、小児科部会の先生方と1年くらいずつ勉強会等をしております。いままでは勉強会の中に外来講師の先生方を招いてましたけれども、今年度はお互いの数字とか実態を持ち寄って勉強会をということで課題になっておりますので、その辺のことを早々に先生方と検討してみます。2点目の1歳半健診の減少の理由ですが、本年度を見てもわかりませんが、その中でも最近目立つというか、余りニーズをとというか、数は少ないですが、受診に幅を持たせてその1カ月だけがワンチャンスということではなくて、やっている中で感じるのは子ども中心に考えていない親御さんもいらっしゃるのかなというそんな感じでいらっしゃる。問題は若干あるのかなというふうに思います。

委員 必要を感じないというのがありましたよね。それはどういう意味なのですか。

保健婦 中に本当にまれだったのですが、以前に個別健診に行くと親御さんの受け止め方の違いだと思うのですが、それがいやだったので、今度はどうしようかというのがありましたけれども。

委員 2番目の若年夫婦へはどのような対応をしているかは。

保健婦 その辺なのですが、これは転入の段階の妊娠届けで母子手帳を交付するわけ

ですが、保健婦の窓口だけではなくて、各行政センターでもやっております、そのとき必ず転入者に対しましてはこちらの方に連絡をいただくということにしてありまして、ご本人からお電話をいただいたときに状況をいろいろ教えていただくということで、その時期に必要なことのいろいろなお話しもさせていただいて、必要によっては家庭訪問しておりますが、その中で若年の場合には始めてお母さんになる方を母親教室にお誘いをしています。

委員 子連れで入ってきた若年の夫婦は。

保健婦 その辺は6カ月の育児教室に、お友だちが必要ですからということでお誘いをしたりとか、後もう1つは1歳児歯科育児教室。これは1歳2カ月の段階ですが、その辺のどこかつながるようなところと各行政センターで、腰越ですと1回なんです、大船、深沢はちょっと対象者の方が多いので月に2回。そういうところにお誘いをしています。

委員 最近、昨年の秋ごろから急激に若年で20代の前半です。若年の母子家庭、子連れの鎌倉市に転入をしてきて保育園に入ってくるわけです。そういう母親はどう子どもとかかわっていいかわからない。それから離乳食の作り方ももちろんわからない。それで先ほど 委員からの話がありましたけれども、生活の主体は親ですから、子どもを親の都合で生活していますから、子どもは常に置き去りにされている。それが入ってきた段階ではよほど障害が何かない限りでは保健婦との関わりが見られないのです。鎌倉市がそういう人たちに手厚いのか、最近栄区の方からどんどん入ってくる。栄区は待機児童が多くて行かれないのかもしれませんが、この辺をよく対応しなくてはならない。親はともかく子どもがかわいそうなのですけれども。最近思っておりますので、伺ったのですけれども。

保健婦 追加なのですが、障害というか、子どもさんの環境にちょっと気になる場所があって若年の御夫婦で地域の方にお世話になった例があります。ちょうど離乳食にさしかかっているときでしたので、買い物もよくわからないということを見回っていただきながら、買い物を一緒にさせていただくようなつながりをさせていただきました。

委員 そういうふうにつながれた人は非常に幸せなのだけれども、多くは民生委員の人は最近独居老人を含めてケースが非常にふえて、とても子どもどころではないと、年寄りで精いっぱい、そう言っていますから、その辺を今後私たちの委員会ですら救う手だてがあればいいなと思っております。

委員 よろしいですか。37ページの2のお誕生前健康診断のところでも伺っていませんでした。37ページの2のお誕生前健康診断のところでも伺っていませんでした。よかったことがあったのですけれども、平成9年、10年度から、11年にかけて異常なしという方がぐっと減ったのは、例えばそれまではこの項目は異常なしだったのだけれども、急に次の年にこの項目を異常ありという形にし

ましようか。というような何か基準が変わったから、これだけ減ったのか、やはりいままでいろいろお話を伺っていてお母さん、親御さんが中心になっている生活などのあれがあらわれてきたから保健婦さんたちの方でもここはちょっと要指導という形で、指導していかなくてはいけないという形でこういう数字が急にあらわれたのかどうか、ちょっと伺いたかったのですけれども。

保健婦 緻密な分析がまだなのですが、この間きめ細かく先生から上がってくる部分や健診項目とかの兼ね合いですとか、9年度からこちらなのですが、そのときに問題があると思われるお子さんについて、先生に問い合わせをしています。そうすると先生がやはりとてもきちんと返してくださって、そういうような相乗効果で先生の方からも細かいところも上がってきているように思います。

委員 よろしいですか。保健婦さんに質問です。35ページの2番の親子相談のところなのですが、母親自身がカウンセリングを希望する声があるが、現在は心療内科を紹介する程度の対応であるため。とここにあるのですが、保健婦さん、カウンセリングの研修とか、勉強とかそういう教育というのはどういうふうに行われているのかなと思って。

保健婦 学生のときはもちろん科目の中にもありますが、やはりこれはケースを積み上げて卒後教育の部分があると思いますので、その辺は新任の県の研修の項目に盛り込まれてありまして、それから中堅の保健婦とか、それと合わせまして、時間内ではやれないものですから、昨年から時間外に1カ月に1回ずつ、臨床心理士の先生を囲みながら勉強会を自分たちの時間の中でやっております。

委員 そうですか。

私も保健婦さんとか、学校の保健の先生がカウンセリングの勉強をもっとしたいという方が結構いらして、私も時々お教室みたいのをやっているのですけれども、それとは別に私のところに相談に見える方の中で、保健所に行って例えば子育て相談した場合に、やはり指摘を受けて傷ついてしまったとか、後かえって自身をなくしてしまったとか、そういう方が今まで何人かいらしているのです。それ話聞いてみるとカウンセリングの基本でとても私大事ななと思っているのはモラライズしないで、まず道徳的審判を加えないで聞くということが大事だと、そうじゃないと心開かないのです。まずそれで後は最後の方にアドバイスなり指摘なりというのがあっていいのですが、その最初の段階が抜けていることがとても多いなというのは感じて、せっかく一生懸命相談を受ける方も一生懸命よかれと思って、本当もっと注意した方がいいよとか、言葉がちょっとまずかったのではないの。というのはとてもよく

保健婦  
委員

わかるのですが、そういった最初にモラライズされてしまうと、診断されてしまうと逆に傷ついてしまうということもありますので、そこのところをどういうロールプレイなんかでお勉強をされている。もっともっとされたらどうかかなんて思います。

ありがとうございます。

なかなか正しいこと言ってくれるのですね。実は私も幼稚園という仕事から見ますと、児童福祉ですがどうしても保育所中心になります。先ほど虫歯の話が今何人かから出ていましたけれども、私どもの今のヘルパー、今の歯科健診の結果を見ますとむしろ虫歯は非常に減っています。昔よりかなり減ってまして、歯医者さんに褒められるくらい減っております。ですから、これはあながちコンビニの影響というふうに信じてとらえるべきものではないのかなという気はするのですけれども。

もう1つ皆さんのお話を伺ってまして、食生活とその人格形成になんらかの関わりがあるのかなと。食生活が貧しいとか、あるいは親の関わり方というものがどっか裏にあって、そういうものがこう子どもの人格形成にかなり影響を与えているのではなからうかというふうに推測をしながらお話を伺っています。

それで睡眠の話も出ておりましたけれども、うちでも入園の試験のときに睡眠時間を親に必ず聞くようにしています。どうして伺うかといいますと、どうしても入園当初睡眠不足で幼稚園に行くのがいやだ、という子がかなりいるものですから、今現在の状況で結構ですからお教えくださいということで伺いますと、おおむね大体9時ごろまでには寝させているというような回答を寄せてくださいますけれども、中にはそんなに多くはないのですけれども、父親と一緒にお風呂に入って寝るといので、遅くまで起きていますという方もいますけども、そういう方は4月の入園までにできるだけこういう形にしてほしいという願いをしたりしています。ですから、睡眠に関しては幼稚園としてはそう問題はないのではないのかなと思います。

それから食事の件ですけれども、幼稚園は基本的には給食はございません。保育所の方は給食設備がすべて整っておりますけれども、幼稚園の方はお弁当ということになりますから、当然母親が毎日つくるわけです。その弁当の中身を見ますと確かに冷凍食品もたくさん使っておりますけれども、やはりかなり母親としての苦労というのですか、工夫がすごく見られます。かなり彩りもきれいですし、丁寧につくってあるお弁当がほとんどでありまして、中には当然忙しくてきょうはというときも見受けられますけれども、ほとんどの方は一生懸命お弁当をつくっております。ですから、委員のこういう写真を見るとちょっと愕然とするのですけれども。

私の事をちょっとお話ししますと、私のところはずっと私学ばかり行かせていたものですから、家内はずっと今大学生が2人いるのですが、ずっと弁当はつくりっぱなしなのです。ですから、弁当つくるというのも当たり前で、子どもに弁当をつくるからついでに私の弁当をつくってくれるのではないかと、よくついでに弁当なんていうと怒られるのですけれども、食に関しては非常にうるさくて、息子は今高校生でありますけれども、いわゆるコンビニの食事、あるいはファーストフードの食事といってもやはり家でつくってくれるママのお弁当、食事が1番おいしいということ言うのですね。だからそのくらいなんていうのですか。味に対しても料理に対しても貪欲な感じがあります。息子を見ますと、ですからそういうものに無関心というのがどういうところからきているのか私もよく理解できないのですけれども、恐らく幼児期からの生活習慣がそうさせたのではないかなと、あと親の関わりも非常に気になる場所ですけれども、それは見えてこないということで、幼稚園側から見ますと幾つか気になる点があるということです。以上です。

委員長  
委員

ありがとうございました。

お弁当のふたをあけると親の愛情がしみじみ伝わってくるという、愛情表現に1番いい方法だと昔から言われているのですけれども、保育園は給食でたまにしかお弁当はありません。たまたまこの間おもちつきがあって給食室がウルチのお米をふかすのに精いっぱい、お弁当だったのです。年長児の子に「お弁当どうおいしかった」と聞いたら、足りないというのです。全員が足りないというのです。ふたをあけたらごはんが端に寄っている。それで思ったのですけれども、給食が年間通してですから子どもが成長するに従って、食事の量がふえることを親はうかつに忘れていないのではないかと、それでおなからずいてこのお弁当では足りないよという話がありました。そういう意味で年長児にはもっと量が必要なのだよと親には言いましたけど、だって私が食べるよりずっと多いのですよと言うけど、見ると主食が少しで最近はおかずが多いのです。それでその辺が親の食の細さから、子どもの量を判断しているのかななんてそんなことを感じています。

もう1件、委員がつくってくれたこれの中の第1、率直な感想を申し上げますと、この子たち2人本当にかわいそうだなと思うのです。食事の中に母親の愛情が全く伝わってこない。この資料だけでしか見られませんから、ちょっと当たっていないのかも知れませんが、この子大きくなって愛情豊かな母親に成長できるのかなと思います。それでこの子は将来母親になったとき生まれた子にどうかかわるのか、これはこういう食生活をしていけば、そのときの祖父母も関わり方、恐らくわからないのではないかと。ではそれは幼稚園がやるのか、保育園がやるのか。地域社会がやるのか。暗たんたる思いがい

たします。以上感想です。

委員 非常に豊かな食生活を目指して、いろいろお話しを伺っているのだろうと思  
っているのですが、諸外国の食事は実はもっと貧しいのです非常に。  
共働きが多いということもあると思うのですが、朝も大体食堂は満杯、お  
昼も子どもはポテトチップかなんかを食べているだけです学校で。それで夜  
もほとんど日本みたいにいっぱい作る家庭は少ない、見ていますと。食生  
活というのは何を基準にどうしていったらいいのかなというのは、向こうの  
食事見ていると感じます。日本の食事だけ見ているとやはり貧しいなと思  
いますけれども、でもこの人たちはみんな筋骨隆々としてどこから栄養とっ  
ているのかなと思うのですが、アメリカなんか見ていると、食生活と  
いうのはすごく貧しいなと思うのですが、家庭で余りつくらない。む  
しろ外食ですよほとんど。

委員 ドイツの保育園見学したときにも、お昼にどんなもの食べるのかと思  
ったら、フランクフルトのソーセージとマッシュポテトです。ああこれは文化を伝  
えるために給食というのは、こういうのは毎日食べているのかなと思  
ったけどそうではなくてやはり食生活貧しいのです。

委員長 ほかにいかがですか。私、少し食事とずれるのですが、保健婦さん  
がお話しになったところで、人との関わりで、今友だちができないという  
ふうにおっしゃる方がふえてきているというお話し伺っていて、これも  
深刻だなと思うのですが、これも先ほど 委員のご質問と重なるので  
ここ数年のことなのでしょうか。

保健婦 よく地域に出ていった保健婦が、それはとても私たちのときとは違  
って何か人とのつき合い方が下手だね。とそう思うねと、特にそう  
思うねというふうな話が特に最近多くなっています。

委員長 これは例えば対保健婦さんとそのお母さんとの関係ではなくて。

保健婦 いいえ、お母さん方が健康相談をしていて、体重とかはか  
ってなかなか去りがたいので、やはりそこで場所さえあれば遊んで  
いってもらえるのですが、様子を外から見ても何かこうぎくしゃく  
しているような、ずっと溶け込めないところがあるようです。

委員長 それは 委員がおっしゃっていた、今の高校生は物事を自分  
たちで決められないところにつながってくるのですかね。なかなか  
仲間集団というので何かを形成していくというのがうまくい  
かなくなったのでしょうか。

委員 よろしいですか。非常に難しいのですが、一概に決めつけて  
言うことはできないわけですが、全体として若者たち、そして  
子どもたちが人と関わらなくて済むような状況になっ  
ているということと言えます。そして、そういう事例とい  
うのは定型的にはいわゆる不登校の子たちですね。

そういうところに典型的に見られるもですけれども、1つはそういう不登校の子たちが最近特にふえているのは、いわゆる引きこもりというふうに言われています。そういう子たちが確かにふえています。それでその子たち何やっているかという、家で何もしていません。家の中で家庭での仕事、それをしていないのです。板戸閉めるとか、最近は板戸などないのかもわかりませんが、掃除をするとか、新聞をとってくるとか、そういう家庭の中での生活がないのです。そして親もさせていないわけです。それで子どもは学校に行くのだから、学校のことだけやればいいと、そうするといわゆる学校での学習の受験のための力とか、そういう以外のものがなくなってしまうとその子たちに残るものがなくなってしまうのです。それで生きるための喜びとか、目的とか、そういったことを育てられていない。そういった子ではそういう不登校の子だから特殊かということそんなことは全くない。どの子にも見られる現象で、特に幼児からも含まれているのでしょけれど、例えば保育園とかの時期から言えば、例えばテレビが子育てをしているとか、ビデオをいつも見せているとか、親子の関わりやその周にいる大人との関わりがない。不登校の子たちというのは特にそうです。学校に行かないから行けるように何とかしようという。下手なことは言っはいけないということで、周りの大人たちが余りかかわらない。もっと不登校にかかわっている子どもたち自身もかかわっているいろいろなことを考えていかなければいけないのだけれども、それをさせないし、しない。それで特にそういう点では今の子どもたちが同じ世代の子どもたちとともに遊ぶ必要性がない。そういう現象起きています。遊んでいたとしてもテレビが相手に遊んでいますから決して交流がない。自分の意思や考えを相手に伝える必要性全くありませんから、それでそのことをまさに助長させているのが高校の水準でいきますと、いわゆる携帯電話とかそういったものです。あそこで行われている会話というのは全く底の浅いもので、日常の雑談的なものを日常的にやっいて、自分を表現したり、自分をあらわしたり、あるいは他者に自分を理解してもらう、そういう必要性全くないのです。そういう世界に住んでいますから、逆に子どもたちがよくこういっています。戦々恐々としているのです。自分がどう評価されるだろうという。そんなふうな生活していればそんな心配をしないものだと思いがちですが、異常なくらいに自分が周りからどう見られているのか、ということに気がしながら生きているので。それは高校で育ってきたものではありませんから、小さいころからつくられてきたものであろうと思います。それから、日本の社会が今抱えている問題点、これ鎌倉だけの問題ではないというふうに思います。それでそういったことと絡めて考えたときに、食生活も少し話題になっておりますが、栄養士さんにもちょっとお伺いしたいの

ですけれども、私幾つかの食生活の中でいろいろなものが含まれていて、1つに結論づけるなんていうことは難しいわけですが、例えば定型的な事例としておっしゃっていたのが、例えばフォローアップミルクをみんな飲ませる。カルシウムを添加してあっていいのではないかと、子どもにいいのではないかと、それから離乳食にしてもお店で売っている缶詰でしょうね。そういったものをもってきて離乳食にしていると、まさに何ていうのかな、私教師の感覚でいいですね。子どもがえさを食べさせられているような、子どもが子どもとして育てているのではなくて、子どもはペットのようにえさを食べさせられていると、それでそこにあるもの目の前にあって、これに便利だから食べさせましょうということでそれを食べさせられている。そういう現象が私には見られるのです。その1つの典型としてさっきの不登校の話とも絡むのですけれども、食事をする、食事をつくる。ということはどんな貧しい食事であっても 委員がおっしゃっていたように、ともに作る喜びからともにお皿を出したり片づけたりする喜び、そのことを通じて親との会話ができる。ああきょう頑張ってくれたね。こんなことできるのだ。そうすると子どもたちは次に何かやりたいな、こういう思いが家庭の中で親との中で生まれてくる。そういう中で自立性とか、自主性が育ってくるということが食生活の場面を通じて出てくるのではないかな。そういう場面が保育園の中でも幾つか見られるのではないかと、もちろん幼稚園の中でも。そういう家庭での生活が、もうすべて大人がやって与えるものという形になってきているのが先ほどのお話を聞いている中で感じたのですけれども、栄養士さんいかがでしょうか。

栄養士

まず食事が貧しいとか、そういう表現してしまうとかなり難しいのですが、豊かとか貧しいとかは、今お手元にある食生活指針のちょっとそれぞれ御国柄も個人でも感覚が出るので、ちょっと貧しいとかという内容はさておき、私は今のお話で、やはりお母さん達のもう少し馬力がほしいなというのをすごく感じるのです。 委員のお話しありましたけれども、多分奥様はお弁当を幾つもつくっているのはやはり子育てに対する馬力というか、馬力という言葉があれなのですけれども、お家でなんかそれというのはすごく大事なことだと思うのです。

それでちょっと食事とずれてしまうのですけれども、私も子どもを小児科とかにつれて行く場面で、子どもの具合が悪いわけなのですから、前の晩よく寝れないと、そうすると自分は顔も洗ったか、洗わないかで次の日病院に駆けつけるというようなこと。子育てをしていればだれにでもあるような場面なのですけれども、最近のお母さんきれいなんです。だから顔を洗うのと同じ感覚で多分お化粧して、きれいにして来るのだと思うのですけれども、例

えば御飯を炊くとか、お米をとぐとか、ホウレンソウを洗ってゆでるとか、そういう馬力がちょっとどこかにいってしまっていて、ベビーフードを使ってしまうのかなと。最近では給食室から小さなおなべを借りてきて、あのおなべお母さん買って来てとかと、ニンジンもこうやって切ってお水を入れて、なべにかけておけばいいと思うのです。そうするとこういう状態になるのよ。チョコチップメロンパンもおいしいのだけれども、食パンを買っておけば、そのままでも食べられるし、割りとお赤ちゃんとか、乳児の段階から食べられるのだから、こういうふうにしておいてねと食パンを買っておけばみんな食べられるし、いいじゃないというような何かこう栄養士としての話ではなくて、隣のお母さんが話すような話をするようになって、何かそれは1つのやはりお母さんもう少し馬力を子どもにも向けようよというか、今のこの子どもがかわいい時期に馬力が出てくると思うのですけれどそれがみられない。それで悩んでしまうのは答えになっていないかもしれないのですけれど。

#### 委員

食生活とか引きこもりのこととか、不登校の話に全部かかわってくると思うのですけれども、少し前にちょっとお話を聞いたのは、もうすごい暴走族の総長になっていた方が、今は全国的にいろいろな講演をなさりながら、非行に走っている子どもたちをどうやって立ち直らせるかという話をしている方がいらっしゃるそうで、その方がご自宅で自分の娘さんをお二人と後何人か頼まれてお子さんを引き取って、非行に走った子を引き取って、朝6時に必ず全員をたたき起こして、御飯をつくって、お洗濯とかも掃除は当番制で、それでみんなでそろって夕飯を食べているということが一番大事なのに、それが欠けたために子どもが非行に走ってしまうというようなことをおっしゃっていたのです。それはもう非行に限らず不登校のこととか、引きこもりのこととかも、カウンセラーの委員とか委員のお話を聞いていると何か通じるものがあるのではないかなと思うのですが、食事の内容とか、以前に食事をつくったり、今もちょうど委員がおっしゃったように家事を余りさせないで親が大人が全部おぜん立てしたものの中に子どもを迎え入れているような、いろいろな生活の変化もあると思うのです。例えば、お子さんが小学校のころから塾とかに行っていて、帰ってくるのが遅いので子どもの御飯はもうちゃんとできていて、そこでもう冷たくなったものを1度温めて食べるだけとか、そういうようなことも出てくると思うのですが、もう少し小さいうちに幼稚園のころとかはもう喜んでやる時期だと思うので、お母さんと一緒に関わりながら、御飯をつくったとか、自分が掘ってきたお芋をお母さんと一緒に洗って皮をむいたとか、そういうようなところが本当に今

結構、若いお母さんというのも変なのですけれども、私なんかよりもずっと年代の若いお母さんたちは欠けているところが多いと思いますし、何か子どもを先ほどおっしゃっていたようにペット扱いではないのではないのですが、こういうブランドの洋服を着せておいたらかわいいとか、だからそれで砂遊びをしないでちょうだいとかというふうに、しかっているお母さんの声もよく聞きますし、何か本当にとてもかわいそうな時期ではあると思うのですけれども、私たちが自分の子どもが3人いるのですけれども、3人の子どもを育てているときにいろいろな意味でやはり保健婦さんとか栄養士さんたちのお話を聞く機会もあったのですが、「お母さん休め」という言葉をよく聞かされて、お母さんの「お」はオムライスとかで、「か」はカレー、だからお母さん休めに当てはまるような食事をさせないで、「孫はやさしい」と、「ま」は豆類、「ご」はゴマで、「わ」はわかめでイコール海藻とかというような形で、野菜とか、お芋類、お芋というのもポテトはすぐに思いつくのですけれども、ポテトではなくて普通の里芋だとか、サツマイモだとか、そういうものをなるべく食べさせて、「お母さん休め」ではなくて、「孫はやさしい」という食生活を心がけましょうねと言っていついたのですけれども、「孫はやさしい」という食生活を並べて見るとそんなに豊かさとは関係は煮豆だったり、ゴマはご飯の上にかけたお塩と一緒に食べたりして、御飯がいっぱい食べられたりということで豊かさとは関係ないと思うのです。今のお母さんたちはあんまりその言葉事態もご存じないのではないのかなと思っているのですけれども、私たちのときは保健婦さんがその言葉を何度もおっしゃって豆よとか、ゴマよとか、とおっしゃっていたので、それがもう頭の片隅にこびりついているのですが。

委員 先ほど、人づき合いが下手だというようなお話しが出てきましたけれども、今親を見ていますと、自分で決めつけてしまう親が多いです。私は人づき合いが下手だなんですと平気で言うのです。それで入園当初そういうお母さんの姿を見ていてこちらも何とか声をかけていきますと、やはり親しい人も何人かできてきますと、その母親の表情も変わってくるのです。でも何でそんなに自分で決めつけるのかなという、そのちょっと納得がいかないのですけれども、すべてが何かそういういままでの生活歴の中で、なにか蓄積されてきたものがあるのかなというふうな気はするのですけれども。そういう人を一生懸命そうではない、こうだよとやっていくのは結構こちらも骨が折れますよね。そういう人がふえているような気がしますし、それからなかなか相手のいうことを受け入れないというのですか。お互いに自分勝手なひとがふえてきているような傾向はどこの園長の思いにもあります。

委員長 さて、時間も少し、もう1つ資料もありますので、迫ってくるというのです

か、もうお話し伺っていて食事の話ということが1つ中心になったのですが、裏に生活というものがあるというのが見えてきたのではないかなというふうに思います。

それで生活の一つのあらわれようとして非常に典型的に食事ということの中身、いろいろきょうは大変さみたいなものを各委員から披露していただと思うのですが、ただやはり1つ私が気になるのは委員の方からはお弁当を非常にバラエティー豊かなものをつくっているのだというお話しが片方であり、片一方では非常に問題のある食事というお話しもあって、一概に概して、やはり今の親はという形では生活も含めて、断定をすることはできないのかなというふうには感じました。同時に終始いろいろな形でのサポートをしなければいけないこと。これは栄養士としての技術的なところ、どういうふうに子どもを食べさせていくかというような、そういったところから保健婦さんや、今委員のお話しにあった、人とどうかかわっていくかというような、技術的なことというのでは人との関係のところも含めてさまざまあるのではないかなというふうに感じました。

それで4回、これでやってきまして、後で資料の4-3で待機児童の状況も話をさせていただきますけれども、やはり今の子どもたちの大変さ、それから子育ての大変さ、それから子育てをしている親の大変さみたいなものを十分ではないかもしれないけれども、鎌倉市に則して、しかし全国的な状況も含めて、ある程度共通の認識にできてきたのではないかなと思うのです。ただこれを鎌倉市としてどうサポートをしていくか、あるいは対応策を考えていくかという、このこともそろそろ考えていかなければいけない時期にはきていると思います。

5回目以降は、4回の審議会のさまざまな学びみたいなものをもう1回戻りつつ、ではこういった問題にどう鎌倉市が対応していけるのか。あるいは個々の問題をどうサポートしていけるのか。という、そこも一緒に考えながらこういった現状の問題、もう1度振り返ってみたいというふうにいままでのお話し、きょうのお話しも含めてちょっと感じてきたところなのです。

それで待機児童の状況のことをお話ししていただく前に、そんなような私感想を持ったということをご披露させていただいて、特にきょう、あるいはここ4回ぐらいで少し親の状況、子どもの状況、子育ての状況というのが我々の中で共通認識にできましたので、こういうことをコメントしておきたいというようなことがございましたら、各委員の方からいただきと思うのですがいかがでしょうか。

委員

今委員長の方からお話しがありましたけれども、子どもたち、それから周りの大人たちも含めてないがしろにできない非常に大変な状況になりつつあ

るということは、一点言えるのではないかというふうにこの前の論議の中  
でも思います。ただそれがそれができない。その家庭の問題なのか、親たち  
の問題なのかという、もちろんその部分もありますがそれだけではない。  
それでいろいろ親の方もさまざまな形で努力をされている。そして、不十分  
ながらもさまざまなことをやられているのは事実でありまして、やはりもう  
一度子どもを抱えている家庭の労働の実態というところをきちんもう1回ち  
ゃんと見直してみる必要があるのではないかというふうに思うのです。先ほど  
こういう話がありました。お子さんを一緒にお風呂に入りたいと、こういう  
ふうに考えられているのでしょうか。スキンシップをきちんとりたいと、そ  
のためには朝は寝ている時間にでかけてしまうと、寝かせてあげたいと、だ  
からこそ帰ってからスキンシップの時間をとりたいと、それで夜中の12時、  
2時というのはむちゃだと思いますけれども、それはそれとしても、そうい  
う子どもに対して親が何かできることはないかと、そういう努力をやはり極  
端な事例ではありますけれども、されているのではないかというふうに思う  
のです。ただそれ以上にやはり、自分自身を見詰めてみましても、今のどこ  
の職場でも全くゆとりがなくなってきていると、子どもに対して何か一緒に  
作業をしたり、一緒に考えたり、そうしてあげられるような余裕がなくなっ  
てきているという実態があるのだというふうに思うのです。それでますます  
景気が悪い中で、そういう実態が進行してきてしまう。そしてその分どこに  
逃げ口があるかという、やはり金さえ出せばなんでもそろってしまうよう  
なコンビニが24時間、そういった社会の全体の枠組みができつつあるとい  
う中で、どういうふうに子どもを大事にして子どもを中心にした社会をつく  
っていけるのか。そういう観点から、親の実態をきちんとして見えていかないと、  
そのところを私たちはサポートしようといっているわけですから、そうい  
う論議を進めていきたいというふうに思います。

委員長

ほかにいかがでしょうか。

委員

ずっといろいろ現状を伺って、勉強になることが多かったのですが、やはり  
少し今後議論していくに際しまして、整理をする必要があると思うのです。  
まず1つは、よくこれは明らかになったと思うのですが、子どもについての  
問題を語るときに子ども自身に対してどういう働きかけを我々行政がしてい  
くかということももちろん1つ、それからもう1つは親に対してどういう働き  
かけをしていくか。これはもう議論する前から本当はわかっていたことかも  
しれませんが、そういうふうに分けた上で親に対しては今、きょう聞いてい  
た話では1つは知識の欠如というのがあると、例えば非常にスキンシップが  
大事だということは今の話でいいますと、それと子どもを2時まで起こして  
いることどちらが大事なのか。一生懸命やられていても知識がないというこ

とで、かえって悪い方向へ進んでしまうという、そういう知識のなさというのが1つあるだろうと。

それからもう1つは先ほどから言われていますが、条件がないと条件整備ができていないと。例えばそれは労働時間であったり、経済的な側面であったりというようなことです。それから一般には親は子どもがかわいいから一生懸命育てるだろうというふうにいわれているけれども、いままでの話を聞いているとそれを前提にして議論していいのかどうかということがちょっと感じました。例えば今のような知識が整備され、条件が整備されればそれでうまくいくのだろうか。という親の意欲ですね。子育ての意欲ということについてもなにかしらのサポートが必要なのかなとちょっときょうは新しい感じをもったのですけれども、やはりどれが大事だということではなくて、やはりここで議論するときにはその1つ1つに対して、我々はどういう働きかけができるのかということを一応混乱しないような形で議論していく必要があるなという感じを受けました。

委員長 ありがとうございます。

委員 さっき、お父さんとおふろに入る。それはスキップをしたいからという話がありましたが、そうばかりではないでして今核家族化が進んでおまして、お父さんが帰ってきておふろから出た子どもの体をふいて、あるいは着せてくれないとお母さん一人ではおふろに入れられないのです。裸で子どもの洋服着せるわけにはいけないので、それでお父さんが帰ってくるまで待っていて下さいということで、そのうち子どもは眠くなって。それと保育園に来ている子は保育園のおふろに入れます。それで頭もそれなりの線でやっていますから、頭洗って、体を洗って入浴させる。そういう様子を見ていると、今の若い両親の家庭というのは核家族化の影響を大変大きくこうむっているのではないかな。そういう家庭に崩壊直前にある家庭に、行政としてはどう関わりあえるのか。何かしてあげられる手だてはないのか。その辺をもうちょっと考えてみたいなと思うのですけれども。

委員長 私話伺っていて、もう1回やはり親と子どもともう1つ足すとすれば鎌倉市という地域が何かできるのかというようなこと。それが行政がどう地域をサポートするかという、そんなことも考えて見たいなとちょっと感想の感想になりました。

それでは4-3の方、これはこの間の宿題だと思いますので事務局の方から、説明していただきたいと思います。お願いします。

事務局 恐れ入ります。4-3の資料です。今委員長が言われましたとおり、前回のときに待機、鎌倉市内保育所の待機児童の状況ということで地域別の資料を出しています。これは12月現在のものですので、4月から11月までのデ

ータということで見ていただきますと、4月の時点では待機児童総計では2人の状況です。公立園、私立園ともに待機児童対策をやっていただきまして、待機児童がほとんどない状況をつくったということでもあります。それで現状ですが、11月の時点で44人、地域別に見ますと鎌倉地域が14ということで多い数字が出ています。後大船地域、深沢地域、腰越地域の順ですが、玉縄は比較的孩子がふえている割には地域的には待機の数が少ないということがいえるのかなと思います。ただこれは地域そのものの保育園に入所している方だけではありませんので、やはり親御さんの就労の関係で、そちらに近い園ということで越境なされる方もいらっしゃいますので、こういうことも若干あるのかなと思っております。以上でございます。

- 委員長 この資料4 3についてはご質問ございますか。
- 委員 この待機児のカウントの仕方なのですが、例えば無認可の施設に入っているけどもこの待機児童に入るのかどうか。その辺をちょっと教えていただきたいと思えます。
- 事務局 この資料につきましては、今 委員さんがおっしゃいましたように私どものカウントの中には認可外の分も含めています。
- 委員 入っているということは、そこに入れてもまだ待機しているというのがこの数字ですか。
- 事務局 はい。
- 委員長 ほかにいかかですか。
- 委員 行政でこれつくられるときに、恐らくこれまでも保育園の数だとか、定員だとかいうことの1つの目安を目標の数字にされていると思うのですが、その場合どこの数字を見て基準にされてきたのかという、例えば4月の時点で待機児がないということを目標にされてきたのか、されているのか、これまで。あるいはこの数字が4月、5月、6月というこの点で、ずっと0になるというところを目安に計画を設定されてきているのか。ちょっとその辺を教えてください。
- 事務局 児童育成計画中で設定をしておりますけれども、基本的には4月1日がどうのということではなくて、年間を通してどのくらいの保育需要があるかということをお考えなければいけない。最近特に待機児童がふえているわけですが、4月の時点というよりは年度途中で入所を希望される方、特に0歳児で、産休、育休明けで入られるという希望される方がふえておりますので、やはり対策なり、方向性を出すにはやはりそこまで含めて考えていくべきであろうというふうには考えております。
- 委員 わかりました。
- 委員長 よろしいですか。それでは次回、5回目の確認をさせていただきますけれど、

次회가2月3日になります。それでこれは午前中にセットした方がいいかな。  
9時半。

事務局  
委員長

9時半、場所は前回やっております第3分庁舎の講堂になります。  
次回以降、きょう少し4回分のまとめみたいなのをさせていただきましたが、  
実際に鎌倉市がどういう今対応をとっていらっしゃるか。市長の諮問のこと  
もありますので、就学前児童を中心に現状報告をしていただき、またそれ  
についてのディスカッションをしばらくしていきたいというふうに考えており  
ます。それで恒例によりまして、次々会の日程を調整させていただきたいと  
思うのですが。

以降日程調整。

次々回は 3月29日(木) 午後5時からとする。